

# 人間のつながりの温かさ 多喜二の生涯 母の語り

劇団文化座公演「母」で、小林多喜二の母・セキを演じる佐々木愛さん(82)。今年、俳優生活65年を迎え、「主演としては最後の舞台」と決めています。全国巡演中の忙しい合間をぬって、作品に寄せる思いなどを聞きました。

## にぎやかな家族に育まれ

「私の記念というよりは、いま劇団がどんな芝居をできるのか、何を伝えるべきかを考えたとき、この作品にゆきつきました」と佐々木さんは話します。

初演の際には、作家・水上勉さんを通して交流を深めた画家の司修さんが、「愛ちゃん、『母』をやってみたら？」とすすめてくれたことも、作品との出会いに。

上演中の「母」(三浦綾子原作、杉浦久幸脚本、鶴山仁演出)は、佐々木愛さん、俳優生活60年を記念した作品。貧困の中、6人の子どもを育てた母・セキの回想を通し、作家・小林多喜二の生涯(1903年~1933年)を浮き彫りにします。全国で、100回を越え

「セキは、秋田の貧しい農家の出身ですが、文化座を旗揚げした父も秋田の出身です。芝居は秋田弁で演じますが、司さんは、私が秋田弁を使えない、結果として警察に追

多喜二はどんな青年だったのでしょうか。「誰もが自分らしい人生をまっとうできるよようにと願っていただけなのに、結果として警察に追

「セキにとつて多喜二は心配をかけられることも多い、特別な存在だったと思います。ですが、多喜二は英雄ではない。正義感が強い、ちよつとユーモラスな夢多き青年だったと思うのです。だからこそ、殺されてしまったことがより残酷で、身近に感じられる」と話します。

「母」で主演を演じることは一区切りになりましたが、7月からは戦後沖繩のたたかいを描く『命どう宝』が始まるなど、休む間はありません。

「文化座の名には、『文化』と『耕す』という意味が込められています。土を耕すように、ていねいに作品を作りつづけていきたい」

さらに、「私の場合は俳優だけでなく、作品を選んだりもしますので、頭が働く限り現役を続けるつもりです。若い世代と一緒に、創立の理念を引き継いでいきたい」と、佐々木さんは話します。



母ともゆかりのあった新婦人だからと、母・鈴木光枝さん(故)のブラウスを着て取材に応じる佐々木愛さん(東京 北区の劇団文化座)

ささきあい 1943年東京生まれ。父は劇団文化座の創設者、佐佐木隆、母は女優、鈴木光枝。初舞台は61年「荷車の歌」(山代巴原作『平和ふじん新聞』1955年1月~56年4月連載)。78年度「サンダカン八番娼館」(山崎朋子原作)で文化庁芸術祭優秀賞、82年「越後つづいし親不知」(水上勉作)で紀伊國屋演劇賞を受賞。87年、劇団文化座代表に。日本劇団協議会顧問、日本新劇俳優協会会長

俳優 劇団文化座代表 佐々木愛さん



「母」の舞台エピソード。セキ(佐々木愛)と多喜二(藤原章寛) (写真は文化座提供) ※今後の公演情報は、「劇団文化座」のホームページ(http://www.bunkaza.com)を参照ください

## 文化座の理念を次世代に

「地から湧いた演劇」を理念に掲げ、戦時下の1942年に旗揚げされた文化座は、来年85年を迎えます。農民や労働者、沖縄、被爆者、中国残留婦人など弱い立場の人たちに視線を注いだ多くの作品を送り出してきました。

「先口、劇場の受付に立つてごあいさつをして

「文化座の名には、『文化』と『耕す』という意味が込められています。土を耕すように、ていねいに作品を作りつづけていきたい」

さらに、「私の場合は俳優だけでなく、作品を選んだりもしますので、頭が働く限り現役を続けるつもりです。若い世代と一緒に、創立の理念を引き継いでいきたい」と、佐々木さんは話します。

## 編集部から

1面、共同親権の危うい面、DVや性搾取など、女性を脅かす問題の根底には「支配」という共通の本質が潜む。取材で得た気づきは重く暗いものですが、北仲さんの優しさに救われました。(麻)



クラフトひものこいのぼり 岐阜・関市 桂川裕見子 関支部カナリア班クラフト小組でつくりました。いつもおしゃべりしながらバッグや小物を作っています。



(☆風景、人物、動植物、9条グッズの写真をお寄せください。Eメールでも可)



③肉を端に寄せ、あいたところにジャガイモを入れて炒め、つやが出たらビールを注ぐ。細かい泡が落ち着いたら、すりおろしたトマトを加えて火を少し弱め、ふたをして10分煮る。④みそとしょうゆを入れ、タマネギとインゲンを加えて、ふたをして7~8分煮込む。火を少し強め、ふたを取り、汁気がなくなるまで時々混ぜながら煮る。 ■1人分366kcal、塩分1.5g

〈月1回〉 旬レシビ 新ジャガと豚こまのビール煮 管理栄養士・料理家 金丸絵里加